

令和2年度 農山漁村振興交付金(山村活性化対策) 事業実施主体 評価結果

1. 事業評価の実施

令和2年度に実施された農山漁村振興交付金(山村活性化対策)の事業について、「農山漁村振興交付金(山村活性化対策)実施要領」(平成30年3月28日付け29農振第2261号農林水産省農村振興局長通知)の第9の1の(1)の規定に基づき、評価を行ったので、その結果を公表する。

2. 評価結果

都道府県	市町村	事業実施主体名	事業実施段階							評価	評価コメント	
			H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3			
長野県	伊那市	伊那市	●	●	●					□	B	計画期間も終盤となります。地域の状況や市場の動向も注視し、新たな商品開発等、取組を進めてください。

(注1)「事業実施段階」の凡例： ○…交付対象年度(計画) ●…交付対象年度(実施済) □…目標年度(計画) ■…目標年度(実施済)

(注2)「評価」の区分： A…優良 B…良好 C…低調

3. 第三者の意見聴取

農山漁村振興交付金実施要領別紙3の第7の1の規定に基づき、第三者である伊東嘉文氏から評価に当たり意見の聴取を行った。第三者及び意見聴取の概要は以下のとおり。

【第三者】

伊東 嘉文

【意見聴取の概要】

《商品開発について》今年度も新商品の開発が叶わず、開発に苦慮していると拝察します。取り組みへの参画者の確保に課題があると聞いていますが、今年度旺盛だったキノコ関係での新商品など、最終年度での商品開発に期待します。

《特用林産物の売上げ》収穫も旺盛だったようで、道の駅での商品として一定の存在感を示せていることは評価できます。

《耕作放棄地の解消》課題だった、新たな実証地での取組みが実現できたことは評価できます。法面の多い中山間農地での除草管理は、永続的な課題です。本取組みは、その課題に一石を投じていると思いますが、今後、羊の頭数も増やし、地区内に更に普及していくことを期待します。

農山漁村振興交付金(山村活性化対策) 評価シート

1. 事業実施主体(評価者)	伊那市	事業開始年度	目標年度	事業実施期間
2. 取組振興山村名	旧 高遠町(長藤村、三義村、藤澤村)	平成27年度	令和3年度	令和2年4月1日～令和3年3月31日
3. 事業費(うち国費)	なし(交付金はH29年度で終了)			
4. 第三者氏名	伊東 嘉文			
5. 事業評価				
総合評価				
○ 取組の実施状況や目標の達成に必要な取組が十分に行われたか。 (①から④までを踏まえた総合的な評価)		(評価理由及び助言等のコメント)		
評価 (該当に○)	(A) (B) (C)重点指導対象	《商品開発について》開発への苦慮が伺えます。今年度旺盛だったキノコ関係での新商品など、最終年度での商品開発に期待します。 《特用林産物の売上げ》収穫も旺盛だったようで、道の駅での商品として一定の存在感を示していることは評価できます。 《耕作放棄地の解消》課題だった、新たな実証地での取組みが実現できたことは評価できます。		
① 取組状況				
○ 目標の達成に資するための取組が行われたか。		(評価理由及び助言等のコメント)		
評価 (該当に○)	(A) (B) (C)重点指導対象	・特用林産物(キノコ)については、収量も上がり、販売努力が実った構図。 ・羊の放牧実証地についても、拡大が実現したことは評価できる。		
② 事業実績				
○ 事業実施計画の目標は達成できているか。		(評価理由及び助言等のコメント)		
評価 (該当に○)	(A) (B) (C)重点指導対象	総合達成率 122% = [指標1(104%)+指標2(75%)+指標3(188%)]÷3		
③ 実施体制				
○ 事業実施主体の取組体制は十分に機能したか。		(評価理由及び助言等のコメント)		
評価 (該当に○)	(A) (B) (C)	引き続き、取組みへの参画者の確保が課題と感じます。 充実した取組みのためにも、マンパワーの更なる確保を期待します。		
④ その他				

※複数名の学識経験者等第三者から意見聴取している場合、第三者間で調整した意見結果を記載する。

別紙2

(任意評価様式第3号)

令和2年度	事業開始 5年目	長野県 伊那市	伊那市
-------	-------------	---------	-----

農山漁村振興交付金（山村活性化対策）

○事業の実施状況

羊による除草管理



耕作放棄地への羊放牧 (R2.6月～10月)

特用林産物(キノコ類)の増殖



収穫の様子 (R2.10月)

○今後の事業構想

補助金事業としてはH29年度で終了となったが、元々の活動母体である組織（伊那東部山村再生支援研究会）が引き継ぎ、取組みを継続した。特用林産物の増殖については、H29年度に植菌した原木からの収穫がH30年度より始まり、ようやく収量も増えてきた。

R3年度は、最終目標年度となるため、旺盛なキノコの生育も追い風に、新商品の開発も結果を出したい。

羊放牧による耕作放棄地の解消は、今年度新たな実証地を追加できたが、地域内への普及度は道半ばである。今年度は、羊1頭の買取も実現できたため、これを機に、信州大学や他地域との交流（交配）も計画し、優良な次世代の増殖にも取り組むことで、地域での普及の契機としたい。